にっぽん多文化共生発信プロジェクト

2020

オンラインイベント

私の歩いてきた道

―多文化共生への対話―

CASIO×MAU

カシオ計算機株式会社・武蔵野美術大学　産学共同プロジェクト

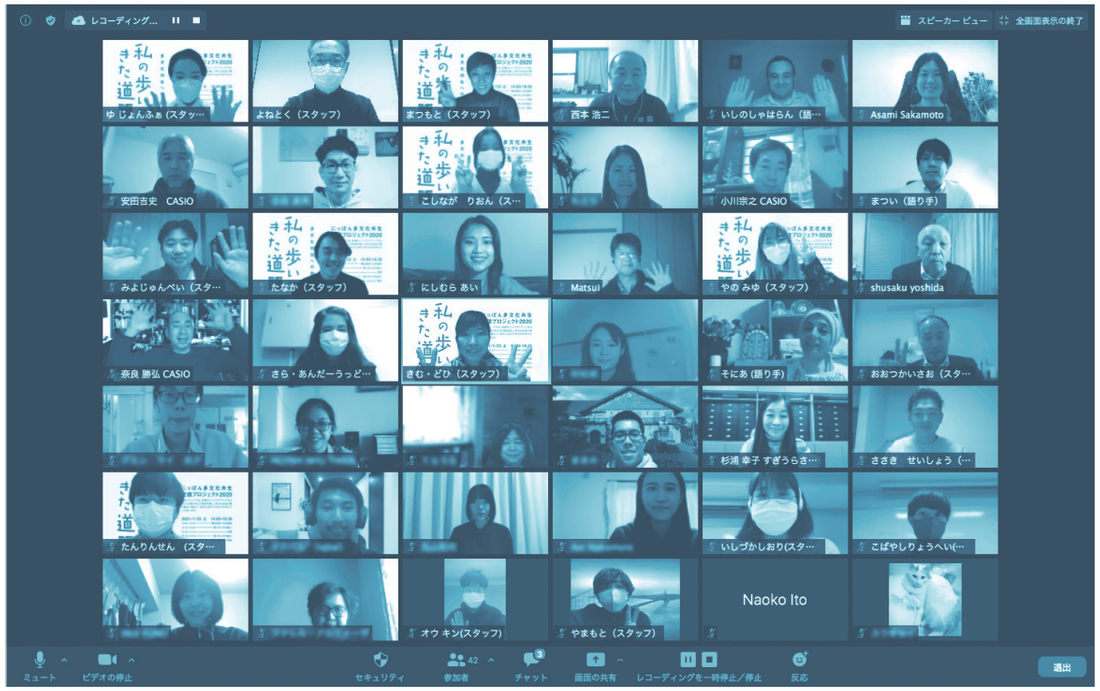
CASIO × MAU

カシオ計算機株式会社・武蔵野美術大学　産学共同プロジェクト

現在、日本社会は急激に多文化化している。
多様性を内包する社会は、より豊かであると同時に、多くの課題と向き合わなければならない。
本プロジェクトでは、日本における多文化共生社会の実現をめざした取り組みを取材し、それをドキュメンタリー映像にまとめ、公開しています。 また、公開を通じて、日本に暮らす人々の多文化共生への理解を促進するとともに、来日を検討する日本語学習者の日本への理解を推進することをめざします。

https://web.casio.jp/mau/

プロジェクトの成果はこちらの QR コードからご覧いただけます



目次

はじめに

I　2020 年度プロジェクトについて

5　プロジェクトマネジメント — 三代 純平
　　プロジェクトの流れ
6　映像デザイン — 米徳 信一
7　プロジェクトの概要

II　5人の「語り手」と5つの対話

9　異文化間コミュニケーションのためのヒント
　　石野 シャハランさん

11　日本にいる外国の子どもたちのために
　　佐々木 聖嬰さん

13　留学生、そして社会人として
　　サラ・アンダーウッドさん

15　チュニジアから来た私がハッピーでいれる場所
　　スラマ・ソニアさん

17　自分にできること、自分がやること
　　松井 孝浩さん

III　イベント参加者のコメント

19　西本 浩二さん
　　西村 愛さん
　　坂本 麻美さん

20　アンケートから

IV　プロジェクトメンバーのふりかえり

23　多文化共生が作る枠組み — 越永 璃音
24　「無力」を知り、「力」になり — 譚 林宣
25　たぶん少しずつ馴染む — 田中 椋平
26　「知る」そして「発信する」— 矢野 美悠
27　共感のコミュニケーション — 柳 廷和
28　メンターのコメント
　　大塚 功
　　金 度希
　　松本 貴美子

V　ドキュメンタリーについて

29　作品概要
30　石塚 詩織
31　王 鑫
　　小林 陵平
32　山本 友紀也

VI　オンラインによるプロジェクトの課題と可能性

33　総括
　　三代 純平
35　学生の意見
　　越永 璃音
36　譚 林宣
37　矢野 美悠
　　柳 廷和
38　田中 椋平

はじめに

大塚 功

おおつか いさお　カシオ計算機株式会社

今年度で４回目となり、年々、充実してきたこのプロジェクトも、本年度は新型コロナウイルスの影響を受け、多くの人を招いての発表会も断念せざるを得ない状況となり、一旦「中止」という言葉もよぎりましたが、ムサビの先生方の熱い想いに後押しされて、実施することができました。「こんな時期だからこそ、学びを止めない」「こんな時だからこそ、できることをやる、やらなければならないこと」そんな想いで、今年度はオンラインで実施することにチャレンジしました。カシオとしても、急速に進む DX（デジタルトランスフォーメーション）に向けて、今後の教育事業に、どう取り組んでいくか模索していたところでもあり、今回のオンライン化への挑戦は、とても興味深いテーマになりました。取材から、発表会まで原則オンラインとし、一部必要に応じて対面授業を取り入れたハイブリッドの授業は、この様な社会情勢の中での学び方を模索する上で、私たちにとっても、とても貴重な経験となりました。

学生の皆さんにとって、限られたコミュニケーション手段の中での取り組みは、例年に比べて、更にレベルの高い日本語やコミュニケーション力を要求された授業だったのではないでしょうか。こんな時だからこそできた、貴重なプロジェクトだったと思います。オンラインの取り組みは、初めてだったということもあり、改善して行きたいところはまだまだたくさんありますが、素晴らしいプロジェクトになったと思っています。

最後に取材にご協力頂きました皆様方と、熱心にご指導頂いた三代先生、米徳先生、そして最後まで諦めずに頑張ってくれた学生の皆さんに改めて御礼申し上げたいと思います。来年度は、更に新たなテーマに挑戦してみたいと思っています。

三代 純平

みよ じゅんぺい　武蔵野美術大学

カシオ計算機と武蔵野美術大学の産学連携「にっぽん多文化共生発信プロジェクト」は今年で４年目を迎えました。2020 年度のプロジェクトでは、多文化を背景とする語り手の方を迎え、少人数の対話を重視した参加型オンライン・イベントを企画・実施しました。５人の語り手の方、28 人の参加者が集い、当日は充実した対話の場をもつことができました。ご参加いただいた方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

2020 年は新型コロナウイルスの影響により、さまざまな格差や分断が顕在化しました。急速なオンライン化は社会の効率を上げ、多くの対話の場をつくり出した一方、似たような価値観をもつ人が集まりやすくなったように思います。社会のあそびや他者との出会いがソーシャル・ディスタンスということばがつくり出したエアポケットに落ちてしまったかのようです。だからこそ、私たちは、異なる価値観が出会い、そこから新しい文化が育まれることをめざしたことプロジェクトを続けることを選択しました。昨年までの、現場取材を通じたドキュメンタリー映像作品の制作はできません。オンラインでできること、オンラインの時代だからこそ必要なことを考え、オンラインによる対話の場のデザインをプロジェクトの目標に掲げて取り組んできました。

ドキュメンタリーという作品の代わりに、イベントというコトのデザインがプロジェクトの中心になりました。イベント開催、そしてその裏側を追った一本のドキュメンタリー、そしてこの報告書までが一連のプロジェクトであったと捉えています。９名の学生と教員、カシオ社員の学びの軌跡をここに共有できることを嬉しく思っています。

I　2020年度プロジェクトについて

プロジェクトマネジメント
三代 純平 | 言語文化研究室

今年度のプロジェクトでは、多文化につながる方たちをお招きし、彼ら／彼女らの経験を共有し、多文化社会のあり方について対話するという参加型オンラインイベントを企画しました。取材担当の学生２人（上級日本語の履修者）、記録担当の学生1人（米徳ゼミの学生）、カシオのメンター1人を1チームとし、それぞれのチームが２人の方を取材するという体制を基本としました。結果、３チームで5人の多文化につながる方にイベントの「語り手」として参加していただくことができました。取材チームは、まず、自分たちで「語り手」を取材し、その経験をふりかえります。そこから、イベント参加者たちと多文化共生について考えるためには、どんな話をしていただくのがよいのか議論しました。次に、「語り手」の方たちと当日どのような話をするか、どのようにイベントを進行するかなどを打ち合わせました。

本プロジェクトが企画したイベントは、ヒューマンライブラリーから着想を得ています。ヒューマンライブラリーとは、人を「本」と見立て、「本」を読むかのように、人の話を聞く活動です。マイノリティの方の経験を共有することを目的とした取り組みとして世界的に注目を集めています。ヒューマンライブラリーは、少人数での対話を基本とし、その話は、非公開にすることとなっています。ただし、本プロジェクトでは、プロジェクトの過程全体を記録し公開することで、広く多文化共生について考える場をつくることを目的としているため、事前に参加者に了解をとった部分を公開することにさせていただきました。

このプロジェクトを通じて、学生たちには、多文化がもたらす豊かさと困難、そしてその先に見える希望を感じてほしいと思っています。また、文化を越え、一人の他者の声を聴くこと、他者と対話することの価値を学んでほしいと思っています。さらにコロナ禍によって加速したオンラインによるコミュニケーションについて、オンライン・イベントを運営することを通じて経験的に学ぶことも期待しています。

プロジェクトの流れ

2020 年
9 月
・キックオフ・ミーティング
・多文化共生に関する講義
・ヒューマンライブラリーに関する講義
　ゲスト講師・宮崎聖乃先生
（ヒューマンライブラリー Nagasaki 実行委員会）

10 月
・イベントの企画と運営に関する講義
・ヒューマンライブラリー体験
（協力：ヒューマンライブラリー Nagasaki）
・チーム編成
・取材先「語り手」の決定とリサーチ開始
・チーム毎の「語り手」への取材

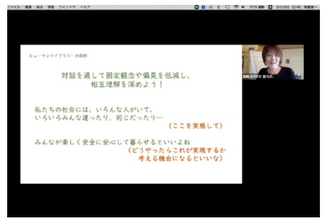
11 月
・取材の報告
・イベントの準備

12 月
・「語り手」との打ち合わせ
・イベントタイトルの決定
・イベントの広報
・イベントのリハーサル

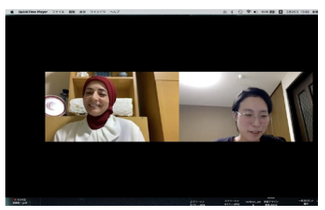
2021 年
1 月 23 日
オンライン・イベント開催
ふりかえり

2～3 月
ドキュメンタリー制作
報告書の作成

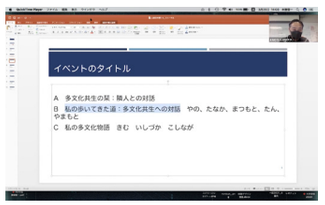
上級日本語履修学生、米徳ゼミ、カシオのメンバーが初顔合わせ



イベントのイメージをつかむため、ヒューマンライブラリーについて学ぶ



「話し手」への取材は全てオンラインによって行われた



イベントのタイトルは学生たちが考えた３案の中から選ばれた

映像デザイン
米徳 信一 | 芸術文化学科研究室

2019 年の終わりに発生した世界規模の混乱の最中、今年度プロジェクトの実施についてのミーティングをカシオのメンバーとムサビの教員で行いました。議論の中心は、必然的にオンラインコミュニケーションの可能性となりました。実技や表現を多く含む美術大学の授業において、これまで「普通」であった対面でのコミュニケーションを失うことは、その重要性を改めて知るとともに、オンラインによるコミュニケーションの形を新たにデザインすることが急務になりました。2020 年前半をオンライン授業にすることで得た経験は、これまでのコミュニケーションとは異なる視点を示唆してくれました。またカシオの皆さんもリモートワークの経験を踏まえることで、ミーティングでは建設的な意見交換ができました。そうした背景から今回のプロジェクトは、「オンラインイベント」へと舵を切ることになりました。

このことは、映像デザインにおいても、プロジェクトの記録という面で新しい局面を迎えることになりました。昨年までは、上級日本語の授業において履修学生がドキュメンタリーを制作することが軸であり、私は対面取材を基本としてその指導にあたりましたが、今回のプロジェクトデザインの変更により授業のコンテンツと運営は三代先生にお願いをして、私はゼミでのプロジェクトのドキュメンタリー制作に注力する形になりました。ただし、授業は全てオンラインではなく、対面も行うハイブリッド方式をとることにしました。こうすることで、プロジェクトのドキュメンタリーを制作する米徳ゼミの学生達は、教室での授業を撮影することができます。これは現場の素材がドキュメンタリーには必要になるとの考えからです。また、オンラインによる授業や「語り手」への取材の様子は、クラウドに自動的に録画されることで、そのやりとりが漏れなく記録されます。オンラインとオフラインの記録素材が、今回のプロジェクトの全貌を示す要素となり、これまでとは違ったドキュメンタリーの形を提示できることを期待しました。

イベントの概要

オンラインイベント
「私の歩いてきた道　多文化共生への対話」

イベント趣旨

私たちが生きる日本社会では、出身・言語・環境など多くの要素が絡み合って一人ひとり独自の価値観をもつ方々が共に暮らしています。本イベントでは、多様なバックグラウンドをもつ方々との対話を通じ、多文化社会の取り組みに触れて、自分に何ができるかを考えたいと思います。

当日のスケジュール

14:00-14:20 開会挨拶・主旨説明
14:20-15:00 語り手との対話①
15:00-15:10 休憩
15:10-15:50 語り手との対話②
15:50-16:20 全体ふりかえり・閉会

当日について

イベントには、多文化共生に関心のある大学生、大学院生、海外で日本語を学ぶ大学生、カシオ計算機社員ら、28 名が参加しました。参加者には、事前に 5 名の「語り手」の物語の「あらすじ」をお読みいただき、希望する「語り手」を登録してもらいました。当日は、5 〜 6 人に別れ、「語り手」の話を聞き、対話しました。各セッションで熱のこもった対話を展開することができました。

ポスターデザイン | 譚 林宣

異文化間コミュニケーションのためのヒント

石野 シャハランさん
いしの しゃはらん | シャハランコンサルティング

プロフィール
22 歳までイランで育ち、2002 年に来日。東海大学別科で日本語を学んだ後、学部生に進み、卒業後は日本企業２社、ドイツ企業１社に就職・転職した。そして2019 年1月、外国人人材と日本企業を結ぶためにシャハランコンサルティングを設立し、アドバイスや研修などを行なっている。

あらすじ
　人とコミュニケーションを取ることはとても難しいことです。相手の顔色を伺ったり、機嫌をとったり…その相手が先輩や上司、また、異文化を持った人だったとしたら余計に気を遣うと思います。皆さんは自分が今まで触れてきた文化やアイデンティティと違うものに遭遇した時、目を背けてしまったことはないですか？ 「関わりにくいな…」、「なんて話しかければ良いかな…」、そう思って勇気を出せずに終わってしまったことはありませんか？　でも、きっと相手もそう思っていたはずです。どうやって話しかけるべきか考えていたはずです。石野さんはそういった異文化間でのコミュニケーションに悩む友人を何度も目にしてきました。中にはそれが原因で日本を去ってしまった方もいるそうです。そんな彼らと直接話してヒアリングを重ねていく中で、石野さんは、会話の仕方をあと少し変えるだけで、双方があと少し協力し合うだけで、コミュニケーションが上手くいくことに気がつき、彼らの役に立つためにシャハランコンサルティングという会社を設立しました。その背景には、多民族国家であるイランでの環境や、移り住んだ日本への想い、そして何より友人を助けたいという気持ちが大きく関わっています。そんな石野さんからこのセッションで、日々のコミュニケーションのヒントをもらいに行きませんか？

取材チーム：結チーム
越永 璃音 | クリエイティブイノベーション学科１年
譚 林宣 | 環境形成領域・博士後期課程１年
石塚 詩織 | 芸術文化学科３年（米徳ゼミ）
大塚 功 | カシオ計算機

モデレーター：越永 璃音　こしなが りおん

セッションでの対話 (抜粋)

参加者__異文化があることを意識していないとうまくやっていけないということだったんですが、逆に私の経験ですと異文化を意識しすぎてどのようにコミュニケーションを取ればいいかわからなかったり、常識の違いから失礼なことを言ってしまうのではないかと不安に感じたりするのですがその点についてはどう考えますか？

石野さん__面白い目線ですね。確かにあるかもしれませんね。でも自分の言葉で当たり障りのない普通の会話をすればいいと思います。「ここまでどうやって来ましたか」、「何分かかりましたか」など身近な最近の話からはじめたらいいと思います。内容の深い話から入らずに、まずは普通の話からコミュニケーションをとってみればいいと思います。

参加者__奥さんはどちらの国の方ですか？

石野さん__日本です。だけど異文化とか多文化とか国は関係ないんですよね。隣の村も隣の街も異文化なんです。隣の家だって異文化なんですよ。

参加者__確かに！

石野さん__私は５歳の娘がいますが、妻と家族３人で同じテーブルでご飯を食べていても文化が違うんですよね。だからそういう小さいところを意識していかなければいけない。宗教や食事など少し違うだけで異文化ですからね。

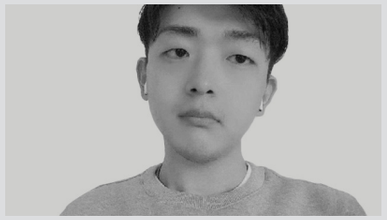
参加者__だからこそ笑顔が重要だと思いました。笑顔でニコニコしていた方がいいということを実践しているなと思いました。

石野さん__結局人って学びたくないことは学ばないんですよね。人が学びたくなるようにこちらが笑顔で努力することも必要なんですよね。

石野さんのコメント

　私が常に大事にしているのは伝えることなんです。何でも、けんかしてもいいからとにかく伝える。言わないとか、明文化されていないとか、あうんの呼吸とか、そういうのをいったん置いておいて、とにかく伝えることを大事にしてほしいです。それは友達でもいいですし、一番大事なのはやっぱり社会ですかね。どう思っているかというのを大事にしつつ自分の意見を述べる。
　自分の意見を、彼らを傷つけることではなくて、伝えること。伝えることを磨くことなんですよね。伝えることを磨かなければコミュニケーションは本当にうまくいかないんです。それは一番身近な人から始めることなんですよ。一番仲よくしている友達でもいいですし、家族でもいいですし、そこから磨いて社会の中で使っていく。
　あと、意識することが大切です。日本には、たぶん世界 1、2、清潔な国だと思うんです。一部のところ以外は間違いなくごみが少ないですよ。皆さんが意識しているから少ないんです。缶コーヒーを飲んだあと、道に缶を捨てないですよね。コミュニケーションもそういうものなんですよ。意識すること。意識して伝えること、意識して言うこと、意識して聞くこと。意識することによって変わってきます。

日本にいる外国の子どもたちのために



佐々木 聖嬰さん
ささき せいしょう | 横浜市市役所職員　多文化ユースプロジェクト

プロフィール
中国瀋陽市出身。中学校卒業後に来日。フリースクールに一年間通って、高校と大学に進学した。横浜市の公務員として勤務する傍ら、外国につながる子どもたちの進路や学習支援を行う「多文化ユースプロジェクト」のメンバーとして活躍している。

あらすじ
「皆に知られていない外国籍の子供を支えたい」
幼い頃に両親の仕事の関係で来日した外国の子供たちがたくさんいます。日本語すらうまくできない幼い彼らにとって、周囲からの支援はどれほど大事なことでしょう。そのような支援を目的に、佐々木さんと仲間たちは多文化ユースプロジェクトを創立しました。
　中学校を卒業したばかりの佐々木さんは、両親の仕事の関係で日本に来ました。彼はフリースクールで日本語を学んで、外国人のための特別入学試験「在県外国人等特別募集枠」で高校に入学しました。しかし、たった一年で両国間の文化的ギャップは越えられません。高校に入学したばかりの佐々木さんは、日本人のクラスメイトとコミュニケーションをとる機会がほとんどありませんでした。そんな彼に声をかけてくれたのは「やんちゃ」なクラスメイトたちでした。そして、佐々木さんは、日本人とのコミュニケーションの第一歩を踏み出しました。しかしながら、佐々木さんのような幸運な人はまだ多くありません。佐々木さんは、自分と同じような経験をした後輩たちのことを支援したいと思い、多文化ユースプロジェクトの活動に取り組み始めました。

取材チーム：結チーム
越永 璃音 | クリエイティブイノベーション学科 1 年
譚 林宣 | 環境形成領域・博士後期課程 1 年
石塚 詩織 | 芸術文化学科 3 年（米徳ゼミ）
大塚 功 | カシオ計算機

モデレーター：譚 林宣　たん りんせん

セッションでの対話 (抜粋)

参加者__佐々木さんが日本に来たきっかけを教えてください。

佐々木__両親の都合で日本に来ました。4 歳の時、お父さんが、8 歳の時、お母さんが日本に来たんですね。15 歳まで中国にいたんで、 7年間はおばあちゃんと一緒に暮らしました。中国では、いわゆる愛国教育を受けていたため、日本に対するイメージは正直良くなかったんですね。でも両親と一緒に住めるという想いで日本に来ました。日本にすごく来たくて来たというわけではありません。これは、私が支援して来た中国につながる子どもたちの多くに共通していることだと思います。ことばも通じない、知り合いもいないという中で、孤独を経験している人が多いです。

参加者__後輩たちの学習支援の活動をするきっかけはなんだったんですか？

佐々木__大学生になって、高校の後輩たちの生活が心配なのと好奇心もあり、高校を訪ねたんです。そこで、一緒に生きる共生ではなく、別々にいるだけの共存になってしまっていると先生から聞きました。それをきっかけに先生たちからいろいろ相談されるようになったり、学校説明会の通訳を頼まれるようになりました。通訳していると、全然日本語がわからない生徒がだんだん増えてきたんですね。で、この問題はどうにかしなければいけないと思いました。で、神奈川県とやりとりしたり、文化庁とやりとりしたり、いろいろ活動してきました。

佐々木さんのコメント

　皆さんと交流して本当によかったと思いました。自分の意見を述べることが大切だと思います。私は今年、日本に来て 10 年目になります。私が感じた日本人のイメージは、意見があってもなかなかストレートに、その人に対して言わないですね。それを私が見るとあまりよくないなと思います。何かあれば述べる、意見を述べる。別にけんかを売るとかそういう話じゃ全然なくて、自分の意見を述べることによってコミュニケーションができるんですよ。コミュニケーションができれば、その人がどういう人なのかが分かりますよね。コミュニケーションがすごく大事だと言っておきたいです。
　あと、発信ですね。発信が必要です。外国につながる子どもたちが、自分が日本に来たくて来るわけではないです。こういうような事実をもっといろいろなところで発信したい。残念ながら一部の日本人が、「あなた、外国人たちは日本に来たくて日本に来たんでしょ？　ですので、日本語を習いなさい」とか「日本の文化を習いなさい」とか、そういうようなのを言っている日本人がいるんですね。ただ、自分の意思じゃなく日本に来る外国人もいるということを、もっといろいろな人に知ってほしいと思います。

留学生、そして社会人として

サラ・アンダーウッドさん

さら あんだーうっど｜小平市国際交流員

プロフィール

アメリカ合衆国出身。高校時代に日本語の勉強を始め、オレゴン大学で日本語を専門に学ぶ。早稲田大学へ1年間の留学。アメリカで銀行員として働いたのちに令和元年 8 月に小平市の国際交流員 (CIR) に着任。

あらすじ

　サラ・アンダーウッドさんは国際交流員として小平市役所で働いています。「なぜ日本なのか」「なぜ、市役所なのか」と思う方が多いでしょう。サラさんが初めて日本の文化に触れたのは 7 歳の頃です。習っていたピアノの先生が日本の方で折り紙やひらがなを教えてもらっていました。中学生の頃、アメリカでは日本のアニメや漫画が普及し日本のポップカルチャーに触れることが多くなります。高校生の頃、日本語の講座を受け始めたことがきっかけで本格的に日本語を学び始め、大学で日本語と国際関係を専攻し、日本に 2015 年 9 月から 1 年間留学します。留学時にホームステイや日本一周、友人たちとの旅行を通して実際に日本の文化に触れました。しかし、長期間生活していく中で日本の良い面だけではなくその裏面も見え始めたと言います。

　その後アメリカに戻り銀行員として働き始めますが、現在は小平市役所で国際交流員として働いています。日本人とは違った視点で市内の観光資源を精査しながら、海外の方が生活しやすくなるように多言語対応を進めています。そして地域の子供たちがアメリカの文化に親しんでもらえるような取り組みを行っています。

　サラさんからみた日本の文化、そして留学後アメリカに戻ったサラさんが再び日本に戻り国際交流員になった経緯とその仕事内容について語っていただきます交流員になった経緯とその仕事内容について語っていただきます。

取材チーム：杏仁豆腐

矢野 美悠 | クリエイティブイノベーション学科 1 年

山本 友紀也 | 芸術文化学科 3 年 (米徳ゼミ)

金 度希 | カシオ計算機

モデレーター：矢野 美悠　やの みゆ

セッションでの対話 (抜粋)

参加者__外国人として日本で暮らしていて日本がもっとこういうところが変わったら外国人の人が住みやすくなると思いますか？

サラさん__多分、一番周りの友達が気になっているところは日本に何年間住んでも日本語が上手くなっても “ 外の人 ” として見られてしまうことかもしれない。なんか西洋の顔見て、日本語わからないなっていうふうに思う人が結構いて、それに混乱してしまったり、なんだろう、普通の人としての扱いをしてほしいなっていうふうな考え方が。それが変わったらすごく住みやすくなるなと個人的に思っています。

参加者__私は去年の 4 月に日本に行くつもりでしたが、新型コロナウイルスでいくことができなかったです。私は1年間ぐらい語学学校で日本語を勉強しています。ですが、私の話す機能と聞く機能があまり良くないです。サラさんは日本に行ってコミュニケーションで問題がありましたか？

サラさん__交換留学したとき、まったく日本語がしゃべれなかった状態です。だから、普段は、付き添って通訳してくれる人がいたんですが、ホストファミリーと過ごす時は誰も付き添っている人がいなかったんですよ。私はまったく日本語がわからないし、ホストファミリーもまったく英語がわからない。だから「来て」「食べる」とか、ジェスチャーを使ってコミュニケーションをとったんです。だけど、しゃべりたい気持ちが結構あったので、それがあるだけでなんとなくコミュニケーションがとれると思うんです。今も振り返ってみて、怪しい日本語が結構あったと思いますが、頑張る気があるだけで相手も親切に話してくれたり、それだけで日本語の勉強にもなると思うし、あんまり怖くないかなっていうふうに思ってるんです。

サラさんのコメント

　改めて、今日はありがとうございました。二つのセッションをして、いろいろな人と会話ができてよかったなと思っています。やはり最近は新しい人と接触する機会がほぼなくて、新しい人とやっと会話ができて、いいなという印象が強く残っています。

　みんながこういう時期で大変ですので、まわりの人に気を配りましょうと思います。在住外国人は、自分の家族とか友達がなかなか会えないから、今こそ気を配ったりとか、思いやりの行動をすることが大切だと思っています。みんな、いろんないらいらする気持ちがあるとしても、思いやりの考えにあふれて、まわりの人に配慮していきましょう。

チュニジアから来た私がハッピーでいれる場所

スラマ・ソニアさん

すらま そにあ | 多文化ひろば あいあい　外国語教師

プロフィール

ソニアさんはチュニジア出身で、夫の転勤で 2001 年に来日。
「多文化ひろば あいあい」のメンバーで、外国語 (英語、フランス語、アラブ語) の先生。

あらすじ

　ソニアさんは来日してから三ヶ月後、娘さんを妊娠、今は3人家族で過ごしています。初めて日本に来た時は言葉も違うし、知り合いも誰もいないので情報を得られなく、とても大変でした。特に彼女は日本で出産と子育ての経験をしたのでなおさらでした。出産の時は、お医者さんの言葉やボディランゲージの意味がチュニジアと違うのでわからなくて、赤ちゃんの状態が心配になってしまいました。またお子さんが小学生の時には、遠足の時学校から来た日本語の案内文が読めなくて、お弁当を持たせることが出来ずとても悲しかった経験もあります。

　しかし、日野市にある外国人のお母さんと日本人のお母さんのコミュニティ、「多文化ひろば　あいあい」のメンバーとして参加してから、人生がずっと幸せになったと彼女は言っています。そこで色々な人々と繋がりながら言葉や文化を学んだり、仕事も得られたりしました。彼女にとってあいあいは「いろんな人々と繋がりを作ってくれたネットワーク」です。これから日本語が上手になって、日本とチュニジアについて、自分の人生について本を書きたい夢を持っているソニアさんの話を聞いて見ませんか？

取材チーム : rhythm-mix

柳 廷和 | 視覚伝達デザインコース修士 2 年
田中 椋平 | デザイン情報学科 3 年
王 欣 | 芸術文化学科 3 年 (米徳ゼミ)
松本 貴美子 | カシオ計算機

モデレーター : 柳　廷和　ゆ じょんふぁ

セッションでの対話 (抜粋)

参加者__ お子さんがいらっしゃって、お子さんが小さい頃に学校で持ってきたプリントを読めなくて大変だったとおっしゃいましたよね。学校で日本人のお母さんの友達はいたりはしましたか？

ソニア__ その時は友達はいなかったです。

参加者__娘さんは日本人の友達のところに遊びに行ったりはしましたか？

ソニア__はい。子供の友達は日本人でした。

参加者__娘さんの友達のお母さんが話しかけてくれたりとか、お茶を飲みに行きましょうとかはしなかったのですか？

ソニア__その時はいなかったです。だから大変でした。

参加者__なぜ日本人のお母さんたちは、ソニアさんに声をかけなかったと思いますか？

ソニア__多分その時は、私が日本語を全然しゃべれなかったからと思います。

参加者__でも「あいあい」では日本の人たちと話せることになったんじゃないですか？

ソニア__「あいあい」に入った時は全て英語で話せて、少しずつ日本語を勉強しました。

参加者 : __子供の学校の先生は何か心配で話しかけたりはしましたか？

ソニア __はい、しました。娘が私と先生を通訳してくれました。私はアラビア語で、先生は日本語で。

ソニアさんのコメント

　まずは武蔵野美術大学の先生方、学生さんにも感謝したいと思います。彼ら／彼女らの努力と、日本での生活の経験について話すこの貴重な機会を与えてくれたことに感謝しています。このような特別なイベントに参加したことで、自分自身に大きな力と自信を得ることができました。また、多文化共生という考え方によって、いかにして外国人住民が宗教や人種を問わず快適に暮らせる社会を作ることができるかを理解することができたと思います。 10 年前に多文化活動に参加して以来、私の人生は 180 度変わりました。いろいろな人とつながり、コミュニケーションをとることができました。日本の文化、伝統、ルールについて多くのことを学びました。さらに、私は仕事をする機会を手にすることができました。

　最後に、この場を借りて、時間と注意を払って私の話を素晴らしいものにしてくれた参加者に感謝したいと思います。彼ら／彼女らのサポートと親切な質問やコメントを決して忘れません。本当に思い出に残るイベントをありがとうございました。

自分にできること、自分がやること

松井 孝浩さん

まつい たかひろ | 文化庁

プロフィール

愛知県出身。タイで6年間、フィリピンで3年間、日本語教師を経験する。国際交流基金、鶴見国際交流ラウンジ館長などを経て、2019 年 7 月より文化庁国語課専門職（日本語教育）。

あらすじ

「自分には日本より海外の方が楽でしたね、同調圧力のようなものがなくて」海外で生活や旅行を何度も経験してきた松井さんは、海外の自由さに惹かれ日本を飛び出しました。しかしその先々で、人それぞれに事情があることを実感し、その環境で自分ができることについて考えました。

多くの国での生活は「自分に何ができるのか」ということについて考えるきっかけになった、といいます。帰国後、横浜市の鶴見国際交流ラウンジ館長として、外国にルーツを持つ子ども達と、その家族の支援に携わってきました。その中で、フィリピン 2 世の子と出会いました。起源が海外にあることを悩みとしていた彼女を前に、自分のルーツを誇りに持ってもらいたいという松井さんの想いから、漫画「ホセ・リサール」(フィリピンの革命家）の原作を務める決心をしました。その後、ご自身が現場にいたからこそ肌で感じたことと経験を踏まえ、そもそも国内国外の差で悩みが生まれないような、自分と他人それぞれをポジティブに考えることができるような仕組みを作ろうと文化庁に移られました。

皆さんがそれぞれの自分のできること、やりたいことについて考えてみる機会になれば、と思います。

取材チーム：rhythm-mix
柳 廷和 | 視覚伝達デザインコース修士 2 年
田中椋平 | デザイン情報学科 3 年
王 鑫 | 芸術文化学科 3 年（米徳ゼミ）
松本 貴美子 | カシオ計算機

モデレーター：田中 椋平　たなかりょうへい

セッションでの対話（抜粋）

参加者__自分は難民の子の教育活動をしています。その中で子どもたちは宗教上の理由で同じ給食が食べることができない場合があります。「みんな一緒に」「みんなで仲良く」などをスローガンとして掲げがちな日本でも、周りと違う行動をとらざるを得ない海外にルーツを持つ子どもたちは特別扱いを受け、悩んでいることが多くあるのを知りました。様々な活躍をされてきた松井さんは、海外ルーツの子どもたちへの日本の対応をどのように感じておられますか？

松井さん__前職で鶴見区で国際交流ラウンジの施設長をしていたことがあります。その中で生徒の2割が海外ルーツの小学校を担当させていただいていたことがあって、今も PTA には懇意にさせてもらっています。その方達と話す中で見えたのは「子どもはよく大人たちのことを見ている」ということです。一概には言えませんが、子どもは大人の鏡で表現方法がよりストレートになるんですよね。子どもの問題を考えることはイコールで大人の問題について考えることなんです。日本では「みんなと同じである」というのはとても心地がいいという感覚が根付いていて、その中で浮いた行動をとる人を見る目は変わってくると思います。でもそんな空気とは逆に「みんな違ってみんないい」と言葉が蔓延しています。確かに個性があることを否定するような方は少ないと思います。ですが大人になった時の社会のルールは未だ個性を大切にしようという作りにはなっていません。

他人が自分と違う、ということに幼少の頃から当たり前としてあるのは私たちのめざすべき " 多文化共生ネイティブ " という存在につながると思います。鶴見区の小学校でも先生が慣れて一々騒がないという風な土壌があるんですよね。子どもがちょっかいを出すのは大人の戸惑いに気付いてるんじゃないかな、と思います。

参加者__言語以外にも人によっては違いがあって、どうしても縮められない問題は多いと思います。どうすればいいですかね？

松井さん__自分の中でどれだけ多くの価値基準を持つことが出来るかが大切だと思います。人は自分の接する世界が視野の限界になりがちです。そうなると人を見る時の基準が淡泊になります。そこをどう乗り越えていくかが重要で難しい点だと思います。

参加者__今の日本に欠けていることは何だとお考えですか？

松井さん__「困っている人同士の助け合い」です。今はチャリティー的な活動が多く、当事者同士の助け合いは少ないかなあと思っています。

松井さんのコメント

多文化共生はやっぱり人によってすごくイメージが違いますし、一見華々しい言葉なんですけども、でも、それは何を指し示しているかというのは、実は非常にわかりにくい言葉なのかなというふうに改めて思いました。

多文化共生について話をしてくださいと言われると、私はいつも批判的というか、わりと暗い話をするんですけど、でも多文化共生というキーワードで、今日これだけの人が集まってこれだけの話ができたということ、その成果を考えれば多文化共生という看板というのは悪くないし、何かの仕組みとしては一つ、これはどうであれ利用していく、活用していくべきものなんだろうなと思いました。

Ⅲ イベント参加者のコメント

イベント後のコメントから

今回のオンラインによるイベントは、新しい試みだなと思いました。今オリンピックの開催が話題になっていますが、ひょっとしたらオンラインオリンピックみたいなことも可能なのかな、なんてちょっと思ったりしました。やっぱり直接でなくてもこうやって顔を合わせて会話をするということが、非常に意味がある取り組みだなと感じます。さっきもLINEでほかの方と情報交換もしていて、オンラインで出会い、LINEでつながりが広がっていくというのはおもしろい体験でした。すごく楽しく参加させてもらいました。

西本 浩二さん | カシオ計算機

私は松井さんと石野さんのお話を伺いました。その中で私が普段活動している海外ルーツの子どもたちへの教育の話を質問させていただいたんですけど、松井さんからは子どものことは大人の問題でもあるという言葉を頂いたり、石野さんからはコミュニケーションの大切さとか、異文化とか多文化は国をまたぐだけじゃなくて、人と人、個人個人の問題だということを改めて学ぶことができました。あと、私は普段こういうオンラインのようなイベントに参加していて、いつも緊張しているんですけど、今日は学生の私の意見も皆さんがうなずきながら聞いてくださって、すごくうれしい気持ちで参加することができました。

西村 愛さん | 東京女子大学・学生

私は石野さんとソニアさんのグループに参加させていただいたんですが、石野さんがくださったすごく強いメッセージが「意識をまずしましょう」ということで、そう言われて、はっと思ったのが、多文化共生について考えましょうとよく言うんですけど、そもそも自分は多文化共生したいのかという、その部分をあまり今まで意識してこなかったなと思って。すごく大事なことなのに。だから考えてみれば、例えば自分は結構子どものころに親から、普通はこうだからと言われることにすごく反発を覚えていて、その普通って何なんだろうというふうに思っていたんですけど、自分はいろんな文化の人が共生するというのはすごくいいことなんじゃないかというふうに思うので、それの答えがYESなら、じゃあ自分はどうするんだ、というところを考えていかなきゃいけないなというメッセージを受け取ったのが一つと。それからソニアさんのグループで感じたのが、ソニアさんから多文化、「あいあい」とか活動のことをいろいろ伺ったんですけど、ソニアさんご自身がすごくそういう活動を楽しんでいらっしゃるなというふうに感じたので、楽しむというすごく原点のところをもっと大事にしたいなというか、多文化共生をすることによって自分も楽しむというところをもっと意識していきたいなというふうに思いました。

坂本 麻美さん | くろしお出版

アンケートから

去年の経験を経て、自分は多文化共生を理解していると思っていたが、自分が見ていた視点の狭さや意識するということが大事ということに気づけた。一つの言葉ではあるが、意味をアップデートしていく必要があるなと実感した。毎年このイベントに参加すれば、考えれば考えるほどわからなくなる多文化共生について自分なりの答えが出せるのではないかなと思った。
（昨年のプロジェクト参加学生）

松井さんがおっしゃっていた「多文化共生は綺麗事ではない」というのが印象的でした。国籍や文化、言語の前にそれぞれ個人の価値観があり、異なる価値観を持つ人をどのように受け入れられるのか、それにはいろんな人と繋がる軸のようなものが必要だとおっしゃっていて、なるほどなと感じました。一方で、異なる価値観を受け入れるといったとき、自分の価値観に触れざるをえず、それはある意味で自分の嫌な部分を自分自身が受け入れなければならないように感じました。そう思うと「私の歩いてきた道」というタイトルがじわじわ沁みてきています。（カシオ社員）

さまざまなルーツの語り手さん、参加者のみなさんと対話をし、改めて学ぶこと、新たに気づくことが多く、充実した時間になりました。他の語り手さんのお話も拝聴したかったなと思いますので、機会があればまた参加させていただきたいです。
このイベントに参加して良かった、質問や発表をして良かったと思うことができましたし、終始ワクワクしながら皆さんのお話を拝聴していました。そう思うことができたのは、この2時間強のイベントのために多くの方々が準備をなさったからだと思います。相手が話しやすい雰囲気、話して良かったと思ってもらえる雰囲気作りに関しても学ばせていただきました。このイベントを通して、多文化共生に限らず、このような「場づくり」についてもさらに関心を持ちました。（学生）

改めてコミュニケーションの大切さを感じました。みなさんが言われていた「自分の考えを相手に伝える」という初めの一歩が、最近自分にも足りてなかったかな、と感じてます。日本人特有の、「こんなこと言うと相手を傷つけるのではないか？誤解されるのではないか？」という思い込みから、ストレートな物言いを避けているように思います。相手にもよるとは思いますが、なるべく思ったことは素直を伝えるようにしたいと感じました。全体的には初

めてのイベントにしては上出来だと思いました（偉そうですみません）。欲を言えば、海外の学生の意見をもっと聞きたかった（大人が多かったので意見を言うのは難しかったかもしれない）。あとは語り部同士の会話も聞きたかったですね。でもスタッフの学生たちもしっかりとしたコメントをしていたし、頼もしく感じました。お疲れ様でした。（カシオ社員）

　このようなイベントに参加できて大変勉強になりました。多文化共生に興味があり、今まで自分では外国人に対しては分け隔てなく接しているつもりでした。しかし、語り手さんの話を聞いて日本人同士でまず相互理解をしなければ、外国人との共生も難しいというメッセージにハッとさせられました。（学生）

　語り手の方とじっくり話すというスタイルは、新鮮でおもしろかったです。zoom の機能を使うことで、実はかえって対面よりも自由に発言できるような気がしました。

　また、これまでの 3 年間の取り組みは、学生さんが作った作品を鑑賞して質疑応答をしてアンケートに感想を書く（評価する）形となっていましたが、今回は何かを評価するというのではなくて、セッション参加者といっしょに多文化共生について考えるというスタイルだったので、より自分ごととして考えられた気がします。あるテーマについて、初めて会う方々と語ってみるというスタイルはコミュニケーションの基本だし、これからも気軽にこんなスタイルで語り合える場が増えていったらいいなと思いました。

　それから、石野さんやソニアさんのような、日本で生き生きと生活していらっしゃる外国出身の方とお会いする機会がなかなかないので、人選もすばらしかったと思います。とても刺激になりました。ありがとうございます。（カシオ社員）

　本日は貴重な機会をありがとうございました。こうした状況下でも、オンラインでできることを、と新しい形を模索されながら実施されている学生さん達、先生方やスタッフの皆様の姿勢に大変感銘を受けました。個人的には、オンラインより対面で会える方を好む人間ですが、今日の BO でのセッションは、zoom だからこそ語り手さんのお話をじっくり聴くことができたような気もします。不思議な感覚でした。

　今日は佐々木さんと石野さんのセッションに参加しましたが、お二人のバイタリティ溢れる行動力と語りの力強さに、とてもとてもエネルギーをいただきました。印象的だったのは、石野さんの「一人ひとりが意識すること」、佐々木さんの「発信すること」というメッセージです。私自身は、隣の部屋の方との交流はほぼない人間ですし、やみくもに交流したり一緒に何かをすることが「共生」ではないように思います。「多文化共生」は目指すべきものなのか、それとも既に今あるものなのか、ということも個々人が「多文化」や「共生」をどのように捉えるか次第なのだと感じます。ただ一方で、色々な人が混じることで摩擦が生まれたり生きにくさを感じる人がいる、ということも現実としてはあると思います。だからこそ、その現状を一人ひとりが意識すること、その「いろいろな文化を持つ人がぐちゃぐちゃに混じり合っていることが普通なんだ」ということを一人ひとりが意識できるようになるために、発信が必要なのだな、ということを考えました。また、松井さんの「共生しなければならない軸は「文化」以外にもある」というお言葉は、大変考えさせられました。この点に関して、もっとうかがってみたかったです。

　過去 2 年、このイベントの取り組みを拝見しましたが、毎年「結局、” 多文化共生 ” って何よ？」という問いに改めて向き合う機会をいただいていて、今年も自分にとって大切な時間になりました。最後に学生さんがおっしゃっていた「多文化共生って、「知る」ことかなと考えていたけど、「理解する、発信する」ことかなと思うようになった」「日常にどう落とし込めるか」といったコメントに大変共感しました。本日知れたこと、考えたことを自分事としていかに身近なところに落としてアクションできるか、ということが大切なのですよね。言うは易し…ということで、何か一つ行動に移してみたいと思います。（大学院生）

　今回このイベントに参加し 2 人の語り手のお話を聞き 1 番感じたことは、多文化交流の大切さです。自文化という狭いコミュニティの中で生活していると、ある種の固定観念に囚われ新しい価値観や発想を得ることは出来ません。しかし、一歩外に踏み出して多文化に触れ合うことで、新しい世界が一気に広がります。今日の対話の中でも、語り手の母国の文化と日本の文化の違いを知ることで、私の世界が大きく広がりました。日本では多文化交流のコミュニティがまだそれほど身近にはありません。そのようなコミュニティが広まれば、日本で暮らす海外の方々の助けになるのはもちろんのこと、日本人も多文化に触れる機会が増え、多文化共生の社会により近づくからです。（学生）

Ⅳ プロジェクトメンバーのふりかえり

多文化共生が作る枠組み

越永 璃音 | こしなが りおん
クリエイティブイノベーション学科 1 年

今回このプロジェクトに参加して私はあえて「多文化共生」という枠組みを作る必要はないと思いました。「多文化共生」の響きはなんだかとても良いことをしているような、なんだか意識が高い人が考えていることのような印象を受けます。それは「多文化」も「共生」も普段からあまり使う言葉ではないし、意味が分かりやすいようでどこか分かりにくいからです。だからこの言葉を聞いただけではなかなか勉強してみようと、一歩踏み出すことが難しいのだと思います。勿論このプロジェクトを経験したからこそ、多文化共生という言葉があるだけでこの議題についてどれほど人に伝えやすいか分かりました。しかし実際の「多文化共生」の本質はこの言葉には無いと思いました。なぜなら結局この言葉から伝わってくるものは漢字から読み取れる言葉の意味だけで「多文化共生」から私たちが読み取るべき本当の意味はこの言葉からは伝わってこないからです。

私は石野さんのセッションの担当でした。二回目の取材で、石野さんは「完璧な人なんていませんから、自分が一番偉いと思ってはいけないです。」と話していました。その言葉を聞いてハッとさせられました。自分は今まで俯瞰的にこの問題について考え、日本におけるマイノリティの人との接し方の答えを探していました。しかしその考え方から間違っていました。自分がどうしたら彼らを救えるかなんて上から目線に考える必要はありませんでした。ただ相手を一人の人物として捉えて、ただその人に向き合えばよかったのです。勝手にカテゴライズしないで、ただ一緒に会話をすればよかったのです。多文化共生と枠組みを決めて大学で答えを探していたものは、小さい頃から大人が子供に言い聞かせてきたような当たり前のことだったと分かったのです。異文化との関わり方や共生の意味を永遠に考え続けて悩んでいたことはただ言葉によって内容を難しくしていただけで本質的な問題はその言葉には関わっていませんでした。この問題は異文化とか外国人とかそういった枠組みごとの問題ではなく個人個人の問題だったのです。様々な枠組みに対して、またその枠を作るためにつけられた言葉に対してどう向き合っていくかではなく、個人個人にどう関わっていくかが大切だと気がつくことができました。

言葉はとても便利な道具で、言葉を使うだけで様々なことを表現することができます。実際に今わたしもその便利な言葉を使って多文化共生について書いています。しかし、言葉を使うからこそ言葉が持つ少数の強い意味だけしか相手に伝わらないことがあります。多文化共生もその一つだと思います。文字自体はとても簡単で一見すれば意外と簡単に理解できるような言葉です。「多文化が共生し合う」この言葉が持つ意味もそう難しいものではありません。それでも、少し踏み込んでこの言葉を理解しようとするとそんなに単純なものではなく、様々な人の感情や想いや考え方や意味合いが関わっていました。言葉で定義付ければ簡単なこともその定義だけで終わらせてはいけないものがあると感じました。多文化共生とは何かという問題については、はっきり言葉を当てはめることはできません。でも、多文化共生を目指す人々が求めていることは、多文化共生という言葉に執着することではなく、ただ純粋に世界中の様々な人と向き合うことだと思います。〇〇な人と決めつけたり、バックグラウンドで判断したりせず、話しかけてみて、笑いかけてみて、思いやってみて、そうやって触れ合うことで自然と「多文化共生」という言葉を使う人々の真の理想が現実になると思います。

譚 林宣 | たん りんせん
環境形成領域・博士後期課程 1 年

「無力」を知り、「力」になり

私にとって、多文化共生はなくてはいけないものだと思います。
多文化共生プロジェクトに参加する前は、「多文化共生」は難しいものと感じなかったので、深く考えたことはありませんでした。中国の大学のクラスメイトは皆漢民族で、広大な中国の隅々からこの大学にやって来ました。地域によって人々は異なる言語の習慣と食生活ひいては価値観を持っています。この大学生活が私と「多文化共生」との初対面だと思いました。その後日本に来て、日本語学校のクラスメイトの髪の色、瞳の色、肌の色が、「私たちが皆違う」ことを語りました。グローバル化が進む日本には、より複雑で多様なコミュニティがあります。日本語だけが公式言語になっているこの国に、中国語で語りかけてくる人によく出逢いました。そうした時、自分も同じ大きなコミュニティに属していると思えて、中国にいたときに考えていた民族や文化の違いなど忘れました。

私は横浜市職員の佐々木聖嬰さんの取材を担当しました。日本人の名前ですが、佐々木さんは中国籍の若い男性です。取材は日本語で行いましたが、彼の中国東北部のアクセントが混ざった日本語を聞くのは、難しいことではありませんでした。彼は私が過去に会った日本の留学生とは違いました。私の周りの中国人のほとんどは、日本語学校で勉強してから、それぞれの大学に通っています。高校卒業は日本語学校に入る最低の条件であるため、皆は十八歳以上です。しかし、彼は中学校を卒業してから、両親に日本に連れられて来ました。そのため、まだ若い彼は日本語学校に入ることができませんでした。日本語を触れたことのない彼にとってこの不案内な国で人生で一番つらい時期を過ごしました。彼は難解な日本語と自分を理解しようとしない両親のせいで、学習意欲を失いました。今回の取材のおかげで、私と佐々木さんは友達になって、彼の友人たちにも会うことができました。彼らも幼い頃に両親の都合で日本に来た中国人です。彼らは自分と中国にいる人たちが異なるコミュニティであることを自覚しています。中国に戻っても、中国にいる同世代の友人との距離感があるようです。私と彼らは中国語で話し合いましたが、言葉と言葉の間に日本人の繊細さと厳しさを感じて、奇妙に感じました。誰もがユースプロジェクトのメンバーです。幼い頃に同じつらい体験をしたため、同じ状況にいる後輩たちを支援したいと考え、集まりました。彼らとの対話を通して、「多文化共生」には、人々の努力が必要なことがわかりました。

私も大学卒業して、留学生として日本に来て、言語と文化の関係で、うまくいかないところがたくさんありました。その無力さを感じる経験があるため、後押しする力の大事さがわかるようになりました。私はこの無力さが力になり、佐々木さんの誘いを受けて、日本にいる外国の子どもたちの支援活動に参加することに決めました。また、これからは「多文化共生」に対する理解が徐々に深まっていくと考えられます。

半年間授業で多文化共生について勉強してきましたが、言葉が持つ意味を理解することはとても難しいことだと思いました。今回も自分の答えを見つけるまでにかなり遠回りをしたと思います。でもこの授業で、言葉の意味や定義を疑ってみることが物事の本質を捉えることにつながっていると気が付きました。今まで当たり前のように言葉を構成して文章を作っていましたが、今は少し言葉に重みがある気がします。これからも一つの言葉に対して考えたり議論したりする機会があると思います。そんな時はまず世間一般に捉えられている意味合いより、自分がどう捉えるべきか考えていきたいと思います。

たぶん少しずつ馴染む

田中 椋平 | たなか りょうへい
デザイン情報学科 3 年

私は「多文化共生」という聞いたことのありそうでない、分かりそうでよく分らない言葉にこの授業で初めて出会った。多文化と共生という二つの言葉が合体したこの言葉を、私は「グローバル的な意味合い」や「隣人を他人と理解し合い生活を送っていくこと」と捉えていた。互いが互いの違いを理解し共に生きる。9 月の時点でのほぼ正解といえるこの解釈を、知識として理解するだけでなく、当たり前に自分の感覚として自然体で持てるか、を自身の生活上で考えた 3 ヶ月の準備期間とイベント当日だった。そのことに気付いたのには 2 つのタイミングがあった。

1つは 12 月頭にあったイベントのタイトルと概要文決めの際。
「本イベントでは学生から社会人まで幅広い世代の人々を交え、多文化共生に関わる語り手のお話を聞き、対話を通して多文化共生を自分ごとにする機会を提供します」この一文からメンバー全員が多文化共生が何かハッキリ説明できる程理解できているのか、運営に回る自分たちは多文化共生を自分事にできているのか、という壁に当たった。「多文化共生とは」については第一回の対面授業の時はそれぞれに発表し、話も盛り上がっていた。しかし 12 月には全員が「分からない」と口にし、話が硬直し黙り込む時間が生まれた。

この話題についての 9 月と 12 月の空気の重さの差がとても印象深い。12 月の皆はそれぞれに話し手とのインタビューを通して多文化共生への解釈を各々持っていた。また人のソレと自分のソレにはそれぞれ小さな違いがあり、その小さな違いこそが重要だと考えていた。メンバーは個々人の小さな想いを全員分をうまくまとめて言語化できず、しかし省略するにはあまりに重要度の高すぎると感じるジレンマの中にいたのだ。今思うにあの空間こそ、互いに同じ方向を向いていても違うところがある、ということを認識しているという意味で多文化理解が成された空間であったと感じる。

2 つ目は話し手の方の紹介あらすじを作成している時。

この時は、言葉選びが重要なポイントとなった。担当の松井さんのあらすじ初稿にて、私は「ルーツをフィリピンに持つ子がソレをコンプレックスとしている」というエピソード中に「フィリピンのハーフの子」という表現を用いた。私が何の気なしにつかったこの表現は「受け手が不快に思う」という指摘を頂いた。確かに普段の会話ではよく使う表現ではあるものの文脈上ハーフという言葉には差別的意味を含まれている。本人は快く思わないであろうことに指摘されるまで全く気付けずにいた。他人の人生を文にするというのはその人のパーソナルな領域に立ち入ること。決して自分の話ではないので、自分の無意識の偏見や意見が出てこないように言葉を選ぶ必要がある。自分では言ってもいいけど、他人に言われると不快に感じるという場合が多々あり、それには要注意なのだ。相手の立場になって考える、というのは小学校でも習うようなことではあるが、言葉での表現の難しさを実感した体験だった。あらすじの執筆では何度も立ち止まり取材のビデオを見直し書き直した。相手が受け取る文章は非常に難しいことではあるが、慎重に向き合うことできっと適した言葉は見つかるし、向き合う姿勢は相手への理解を深めることに繋がる。言葉選びはこうした配慮の一つのカタチとして現れた部分であったと思う。

こういった2つのタイミングは私がたまたまこの多文化共生発信プロジェクトに参加できたことで得ることが出来た知見だと思う。また今回参加してくださった方にとっての ” タイミング ” になればと意気込み、私は参加した。最後に色んな方の感想を聞く中で、今回のイベントは多文化共生を広める画期的なアイデアが生まれる訳でも、自分の考えが大きく変わったわけでもないが、大人たちの「少しずつ理解していこうという姿勢」を作ることの第 1 歩になったと感じた。今の私のように、理解しようという姿勢を意識している以上自然体とは言えない。でもその意識はいずれ子供たちに伝播し、所属や属性で作られるような壁のない ” 多文化共生ネイティブ ” へとつながるのだと希望を持つことができた。いつか今回のイベントのことを「古臭い。今更過ぎる」と感じる世代が生まれたら今回のイベントは成功したといえると思う。

矢野 美悠 | やの みゆ
クリエイティブイノベーション学科 1 年

「知る」そして「発信する」

私は上級日本語1-4の授業で初めて「多文化共生」という言葉に出会いました。「多文化」と「共生」、どちらもわかるようで明確に形容できない言葉です。文化は国でも地域でも違いだけではなく、学校内ルールや家庭内ルールといった日常生活においても存在しています。多文化という言葉に集約されていますがこの言葉には自分の知らない文化も含まれており便利な言葉で終わりではないと感じました。「共生」、文字の通り考えれば「共に生きること」ですが、生きるとは何かそのために何が重要なのかが捉えにくい言葉です。キックオフミーティングの際に行った、多文化共生の定義を考える話し合いで「認め合うことが共生といえるのか」という議論になりました。お互いに干渉しなくても相手の文化の存在を知っておくことも共生ではないか、認め合うまでいかなくても理解することが共に生きる上で重要なことなのではないかなど様々な意見がありました。私は認め合うという言葉でまとめるのはわかったフリをしているだけのように感じ「多文化共生」とは互いの考え方や価値観、習慣の違いを知り、同じコミュニティに存在していることを理解することであると自分の考えをまとめました。

このプロジェクトの集大成であるイベント「私の歩いてきた道：多文化共生への対話」を終え、改めて「多文化共生」とは何かを考えました。私にとって「多文化共生」とは「互いを知ることをきっかけに理解すること」だけではなく「自ら発信することで様々な方々と関わりを持ち、安心して存在できるコミュニティを広げること」でもあると考えます。取材やイベントを通して、サラさんが日本への留学時に旅行やホームステイなどで出会った日本人の方との思い出や国際交流委員として子供たちへアメリカ文化の発信をしていること、英語の音声ガイドの制作をしていることを知りました。サラさんは日本の文化を受け取る側でもあり、自身の文化を発信する側でもあります。異なる文化が共同の社会に存在するためには受け取り手として知ることだけではなく発信していく、能動的な動きも大切だと気づきました。

今年度のにっぽん多文化共生発信プロジェクトはこの報告書をもって終わりますが、参加者の皆様のアンケートから学ぶことやさらに考えるべきことが見つかりましたし、オンラインで発信することの楽しさや大変さを知り、実際に行って気づいた工夫すべき点がありました。今回の経験から学んだことをもとに今後も多文化共生を自分なりに考えていこうと思います。

共感のコミュニケーション

柳 廷和 | ゆ じょんふぁ
視覚伝達デザインコース修士 2 年

長い準備期間でしたが、先生の方々とカシオの皆様と生徒たちがみんなで頑張って協力してきたので、プロセスが安定に進めることができたと思いました。その頑張りがイベントの当日にも現れて各セッションにも参加者たちが安心して話し合えたり、質問を交わすことができたと思いました。

個人的にはこの授業を通じて多様な文化圏の中でのコミュニケーションについて丁寧に考えながインタビューをしたり、他の人々に伝えようと努力することになったので、そのような経験は共感能力を高める貴重な体験だったと思います。

私に多文化共生は、私が外国人の立場になってそしてこのような考える機会を得られたので意識できた言葉だと思います。私は普段ただ他の人の違いについて知ることが楽しいとの気持ちで他人を接してきましたが、多文化についてとか他人の違いを深く知れば知るほどデリケートな部分が感じられました。他の国に旅行したり、住むことになったときには私の言葉や行動が意図したことと違う風に受け入れられたりとかして、それは母国でも良くあることですが、外国人として長期間住むほど難しく感じられたと思います。しかしここでもっと私が理解されているところは何だろうとか、相手はどう理解しているのだろうとかをもっと意識してみることで、母国で理解できなかった人々の行動を外国での人々との関係で理解できたりする不思議な経験もしました。そのような経験から人々はそれぞれ他人の言葉や行動を理解することは生きてきた経験によってそれぞれ違うけど、伝える意思さえ確実ならいずれ伝えることができると信じることになりました。そこで私が思う多文化共生は、他の人々を自分の解釈で判断することなく、そして自分が違う風に判断されたと気にすることなく、ただそのままを受け入れる姿勢だと思いました。

プロジェクトの修了証書を手にした学生たち

メンターのコメント

大塚 功 | おおつか いさお
事業戦略本部

私の担当した「結チーム」は、タンさん、越永さん、米徳ゼミから石塚さん、そして私を含めて 4 名のチームで取り組みました。取材協力者の方を決める時のことですが、取材候補の方のが、他のチームと重なってしまい調整が必要になりましたが、チームの皆の熱い想いと、越永さんのお陰で、無事に希望の方を担当することが出来るようになりました。

私は、取材する方に興味を持つということは、このプロジェクトを進める上で、とても重要なことだと思っています。興味があるからこそ、様々なことについて、お聞きすることができ、共感することができ、発信できる、更に、その為にはどのようにしたらいいのか、そんなことを探求することがこのプロジェクトの原動力になっていると思っています。

タンさんは、このプロジェクトを通して、佐々木さんの活動にとても興味を持ち、個人的なやり取りもするようになったと聞き、私も嬉しくなりました。

石塚さんは、このプロジェクトの各プロセスを客観的に、丁寧に記録してくれました。このチームの活動が、石塚さんの目にどのように映っていたのかメイキング映像を観るのが楽しみです。

金 度希 | きむ どひ
デザイン統轄部

今年は例年と違ってドキュメンタリー制作がメインではなく、オンラインイベントとなり、正直うまく開催できるか心配でした。しかし、イベントまでの一連の流れを振り返ってみると、とても充実した時間だったと思います。

特に、矢野さんの課題をこなしていく粘り強さ、取材でのイベントでの進行力、言葉で表せないほど素晴らしかったと思います。イベントで集まったお客さんにはこういう過程を伝えられなかったのが少し残念なところではありましたが、制作中のドキュメンタリーを配信することで感じていただければと思います。

今年は最も日本語の授業らしい授業だったかと思います。zoom を使ったオンライン授業、取材依頼、取材対象とのやり取り、質問をして当日イベントを構成していく全ての過程において、slack でこまめに指導をしていただいた三代先生のおかげだと思います。ありがとうございました！

松本 貴美子 | まつもと きみこ
デザイン統轄部

今まではドキュメンタリー制作＋発表の場をもってプロジェクトイベント、と聞いていましたが、コロナ禍において今年はオンラインイベントになりました。なんとか今までの成果に劣らないプロジェクト発表になれば、という思いが強かったです。

Slack を使って学生さんメンバーや先生方と多くのコミュニケーションをとってきました。語り手さんとは Zoom を使って数回の取材とメールのやり取りでご本人のご経験を伺い、私たちの中でもっとも伝えていただきたい部分を当日のイベントで語っていただけないかお願いしました。イベント当日は我々も語り手さんも緊張していましたが、対話型（参加型）のイベント、ということもあり参加者のみなさんは少しでも「多文化共生」について考える貴重な時間になったと思います。このような取り組みをしていることを発信していき暮らしやすい日本に将来なることを何かサポートできないか、という思いになりました。イベントについて、また授業の進め方についてたくさんの工夫をしてくださった三代先生、有り難うございました。今まさに編集いただいている映像の完成を楽しみにしております！

V ドキュメンタリーについて

「私たちの歩いてきた道」

ドキュメンタリー作品　45 分 30 秒

制作 ｜ 芸術文化学科 3 年 米徳ゼミ

石塚 詩織
王 鑫
小林 陵平
山本 友紀也

指導 | 米徳信一

作品概要

私たち米徳ゼミの学生は、上級日本語の授業にチームメンバーとして参加しながら、オンラインイベント「私の歩いてきた道ー多文化共生への対話ー」を開催するまでの道のりをビデオ記録しました。膨大な量の映像から必要な情報を整理し、的確な順序で構成を考え、分担して編集をすることは簡単なことではありませんでした。何度も再編集をしながら1つの作品を完成させることができました。このドキュメンタリーは、産学共同プロジェクトの概要を伝えると共に、カシオメンターと学生との関わり、イベント当日を迎える緊張感、そして、プロジェクトメンバーの成長を伝える作品でありたいと思います。

２０２０年は、新型コロナウイルスの流行により、人が集まることが不自由な状況となりました。そこで、産学共同プロジェクトでは初めての試みとなるオンラインイベントの開催が決まりました。イベントは多文化共生というテーマに基づき、参加者が語り手との対話・交流をしながら多文化共生への理解を深めるというものです。５か月に渡り行われた授業は、オンラインと対面を組み合わせた形となりました。ドキュメンタリーでは、そのようなオンライン上でやり取りの様子が分かるように意識しました。

産学共同プロジェクトという名前の通り、カシオ、学生、教員が関わり合いながらイベントを作り上げていくプロセスも重要なポイントです。カシオメンターの大塚さん、金さん、松本さんは、それぞれ学生とチームを組み、語り手への取材やセッションの企画・運営に関わりました。学生にアドバイスをしながらも同じ目線で一緒に考える、カシオメンターと学生との距離感が伝わると思います。

プロジェクトメンバーは、イベントの参考となるヒューマンライブラリーについて学びました。そして、実際にオンラインのヒューマンライブラリーに参加し、オンラインイベントの利点や課題、参加者の立場から得られたことについて考えました。また、チームごとに語り手への取材を行い、彼らの人生やこれまでの経験についてお話を伺いました。人と出会い、話を聞き、各セッションのイメージを膨らましていく中で、イベントの参加者にはどういうことを感じてほしいのか、という部分が徐々に深まりました。

このイベントを作り上げる過程で、プロジェクトメンバーそれぞれが、多文化共生というテーマから自分なりの向き合うべき課題を見つけていたように思います。私たちが歩いてきた、イベントが生まれるまでの道のりをぜひご覧ください。

コメント

石塚 詩織 | いしづか しおり

私は、産学共同プロジェクトのドキュメンタリーを撮るという目的で、上級日本語の授業に参加しました。チームのメンバーとして一緒に参加しながらも、時々離れて撮影に専念しました。このプロジェクトを、内と外から見ていたという感覚です。

プロジェクトが始まり、初めて多文化共生という言葉を知りました。ふんわりと思い浮かんだのは、あらゆる国の人がお互いの文化を理解しあって共に生きること、というイメージです。なんだかとても社会的な感じがします。「多文化が共生する」というテーマは壮大すぎていまいちピンときませんでした。それと同時にドキュメンタリーをどのように撮りたいかというイメージもはっきりしませんでした。

このプロジェクトでとても新鮮だったのは、ヒューマンライブラリーへの参加や、語り手への取材という経験です。その人が自分だけの経験を語り、その話を直接聞くことは、どんなメディアで知るよりも心に残りました。しかし、このような場でのコミュニケーションは想像より難しく、良い質問が出せなくて遠慮してしまうこともありました。一度も質問せずに取材が終わってしまったときは、悔しかったです。

撮影した授業の映像を見返していると、言葉の表現について考える場面がよくあることに気づきました。我々は、壮大なテーマを掲げているのかと思いきや、普段気にすることもないような小さな言葉一つに立ち止まって考えているのです。私は、そこに日本語の授業らしさを感じました。言葉は、辞書的な意味がすべてではなく、使われるシチュエーションや声のトーン、伝える表情、文字ならばその色や形で少しずつ意味が変わります。言葉を考えることは、自分対相手とのコミュニケーションを考えるということなのだと思いました。それまでは多文化共生を「社会のこと」のように思っていたのに、言葉という視点から見つめたら「自分のこと」という風に思えるようになりました。私自身のコミュニケーションに、この小さな気づきが生かせたなら、このプロジェクトで得たものは大きいと思います。

人は生まれてから孤独だと思う。
「共生」と呼ばれる言葉には「共に生きる」の意味がある。共に生きることを決めた以上、そのリスクを負わなければならない。多文化共生」は大きなテーマだ。上級日本語の授業を通して、「人」の領域に着目した。

正直に言うと、最初の頃の私は、このテーマに対してあまり興味がなかった。しかし、ゼミの一部であったため、参加していた。今の私に「五ヶ月の時間を通して、君が何を得たのか」と聞かれたならば、恐らくしっかりとは答えられない。

そもそも私は、異文化とのコミュニケーションはともかく、人と人の間の「絆」と呼ばれるものに対して、そこまで楽観的な態度を持てないのだ。なぜならば、「絆」は単なる信じるか、信じないかの問題ではなく、複雑なものだからだ。とはいえ、私はその感情や「絆」を持っている人に対して感心している。

ソニアさんをインタビューした時、その時のソニアさんの表情や言葉から彼女の幸せを感じ、心から羨ましいと思った。魚が水を望んでいる。木が光を望んでいる。人が他人を望んでいる。

何分、何時間の時間を通して、人の間に一体何が生まれるだろうか。一体何がわかるだろうか。もし、それが何分、何時間でわからないものであるならば、この先の何日、何月の時間で必ずいつかはわかる時が来ると保証できるだろうか？　わからない。

多文化共生であれ、産学協同であれ、授業であれ、私が今まで経験してきたものは、人を考えるためのものだと思う。それに対しての目的はそこまで重要ではない。様々なインタビューを見ると、「これを通して私は成長した」「これを通して私が目標を達成した」という言葉を耳にする。しかし、私はその言葉を信じない。それが事実として確かに存在するかもしれないけれども、私は信じない。いらないかも。

だから私の感想は、「あんまり感想がない」ということだ。
考えや思考を諦めたではなく、考えた結果、「感想がない」のだ。
私は、人前でのコメントや感想を述べる際に、それらの言葉に真心が込められていないならば、何も意味がないと思うのだ。
おかしなものかもしれないが、これが全部だ。

王 鑫 | おう きん

私は今回のプロジェクトを通じて、初めて「多文化共生」という言葉に触れました。一見すると簡単そうなこの言葉ですが、実際はとても奥の深いものだったのです。このプロジェクトは私自身の考え方が大きく変わるきっかけとなりました。
私は上級日本語の授業には参加出来ず、プロジェクトのドキュメンタリーを制作するだけでした。しかし、ドキュメンタリーを制作していく以上、私自身も自分なりに多文化共生」についての解釈を進める必要があったのです。

「多文化共生」とは見ての通り、「多文化」と「共生」という二つの言葉で成り立っています。初めて聞いた時、これらの言葉から感じ取れることは、「様々な文化を持つ集団が互いに寄り添い合い、理解していこう」という志のようなものでした。では、今の日本人は「多文化共生」について深く向き合っているのでしょうか。現在の日本では海外の方々が当たり前のように生活しています。私はこれについて違和感を持ったことはありません。しかし、「自分と異なる文化を持った方を理解し、認め合おうとしていますか」と聞かれたら、今までの私なら正直なところ、「していません」と答えていたと思います。わざわざ異なる文化に向き合って何が生まれるのか、と考えていた部分もありました。これがプロジェクトに参加する前までの私の姿勢です。そのような私が今回のプロジェクトに参加して感じたことは、「多文化共生」とは自分が思っているものより身近な存在であったことです。まず、「多文化」という言葉ですが、これは国や地域の文化の違いといったような大きなスケールでわざわざ捉えなくとも、自分が通っている大学や働いているバイト先でのルールの違いなどといった日常にも潜んでいると考えました。次に、「共生」という言葉には、他者と向き合って認め合うという難しいことのように捉えがちですが、理解することだけでも共生というのではないかと考えました。自分と違う文化を全て認める必要が本当にあるのかと感じます。

これらから、「多文化共生」という馴染みのない言葉は、無理に難しく考える必要はないと考えを変えることが出来ました。明確な定義付けをするのではなく、自分なりの「多文化共生」を見つけていくことが重要だと感じました。

小林 陵平 | こばやしりょうへい

山本 友紀也 | やまもと ゆきや

今年はコロナ禍ということもあり例年とは違った形でのプロジェクトとなり、また米徳ゼミも同じで例年とは違った動きとなりました。

例年、ゼミ生はイベントの運営にはかかわらず、撮影に専念という形式でしたが、今年はゼミ生もイベントの企画・運営に携わりました。初めてのドキュメンタリーであり、授業にも参加しつつの撮影ということで最初はどう動いたらいいのかわからず戸惑いを感じていましたが、回数を重ねるにつれ自分自身の役割、立ち回りなどがわかるようになり、そしてプロジェクトメンバーでもあり、撮影者でもある立場として俯瞰的な視点を持つことができたため、自分自身が伝えたいテーマをどのように撮影すれば映像にのせて発信できるかということまで考えて動けるようになりました。

今回、自分自身がこのドキュメンタリー「私たちが歩いてきた道」に対するテーマは、このプロジェクトに参加している方々にもいろんな人（武蔵野美術大学の学生・教員・カシオ計算機の方々）がいて、それぞれがどんなことを感じて考えて発言し行動していたのか、また多文化共生という言葉を以前から知っていた人、この授業が始まるまで知らなかった人などのプロジェクトを通しての心境の変化を映像として可視化することです。

そして、このプロジェクトの一連の流れを記録し制作した映像によって、一人でも多くの人が多文化共生という言葉に出会い、考える機会を増やすこと、言語・言葉についても考え直すこと、このプロジェクトがきっかけで私たちも多文化共生という言葉と出会い自分事にしていったように、鑑賞した人たちにも多文化共生を自分事にする機会を提供できればなと思っています。

また、この映像を通して産学連携という普段はあまり目にすることのない学生とカシオ計算機の大人の方々が力を合わせて一つの目的に向かって取り組んでいる様子も、身近な多文化共生としての貴重な瞬間を見ていただければと思います。

VI オンラインによるプロジェクトの課題と可能性

総括 | 三代 純平

今年度のプロジェクトの産学連携としてのもう一つの目的は、オンラインによるプロジェクトワークの課題と可能性を考えることでした。本プロジェクトは、武蔵野美術大学の「上級日本語 1-4」の授業として取り組まれました。授業は、オンラインとオンサイトのハイブリッド型で取り組みました。ゲスト講師のレクチャー、ヒューマンライブラリーの体験、オンラインイベントのリハーサルは、全員が ZOOM で参加しました。一方、取材の準備などの細かい打ち合わせを伴うときは、教室に集まり、オンライン参加の希望者のみ ZOOM で参加しました。全体で話し合うときは、教室のスクリーンに ZOOM 画面を投影しました。グループワークの時は、それぞれのグループに PC やタブレットを設置しました。ハイブリッド型で取り組んだ理由は、コロナウイルスの感染状況に鑑み大学全体の実技科目がオンサイトでの授業となったことに加え、プロジェクトを進めるためにクラスの連帯感のようなものが必要であり、その連帯感の醸成がオンラインのみでは難しいと感じられたことがあります。なお、取材、イベントは、感染対策からすべてオンラインによる実施としました。
プロジェクトをふりかえり学生の感じたオンライン授業の長所と短所、そして今後の可能性について整理したいと思います。

オンライン授業の長所

場所の利便性
どこからでも参加できることがオンライン授業の最大のメリットです。本プロジェクトの最中に、濃厚接触の疑いによる自宅待機、海外からの入国による自宅待機などにより教室に来ることができないケースもありました。また、オンラインだからこそ、九州在住の方にゲスト講師をお願いすることができたり、イベントに海外の日本語学習者が参加することができました。オンラインだからこそ出会えた人がいるということがオンラインによるプロジェクトの利点と言えるでしょう。

時間調整の簡易性
場所の移動が伴わないことにより、打ち合わせや取材の調整が容易になりました。とくに、複数名で行う取材は、例年、そのスケジュール調整が大変困難になっていましたが、オンラインによる取材としたため比較的順調に取材日程を組むことができました。

対等な参加
今回のプロジェクトでは、オンライン会議のソフトとして ZOOM を使用しました。ZOOM では、参加者の顔がみな同じサイズで一覧することができます。このことにより、参加の対等性が視覚的に担保されます。このことにより対等な立場での対話が行いやすくなると考えられます。

オンライン授業の短所

適切な環境確保の困難
ネット環境があれば参加できる利便性がある一方、取材などの場合、環境音などが入らず、発話できる場所を確保する必要があります。学生によっては、そのような場所を確保することが難しいことがありました。

公私のあいまいさ
自宅の部屋から参加する場合など、オンとオフの切り替えができずに、集中力を持った授業参加や、礼節ある取材が難しくなる場合がありました。

信頼関係構築の難しさ
オンライン上のみでの関係は、信頼関係を築くのが難しいと感じる学生が多くいました。そのため、自分から発言することに躊躇する学生もいました。

相手の感情把握の難しさ
信頼関係構築の難しさとも関わりますが、オンライン上のみでの関係は、相手の感情把握が難しく、顔の表情だけがアップで映るため、表情に敏感になり、過度に相手の気持ちを気にしてしまうという学生がいまいた。

今後の可能性

ハイブリッドによるプロジェクトの充実
さまざまな短所があるオンラインによるコミュニケーションでありますが、場所や時間の制約を越えるという大きな長所があります。コロナ収束後もオンラインを導入することについて学生たちは肯定的でした。
オンラインとオンサイトをハイブリッドでプロジェクトを遂行することで、より充実した教育活動が可能になると思われます。

オンラインによるコミュニケーション技術の向上
オンラインによるコミュニケーションにおいては、体全体が見えない、場の空気感がわからないなど制約があります。また、常に顔が映るため、相手の表情は通常のコミュニケーションより、意識化されます。このようなオンラインならではのコミュニケーションの特徴があります。今後は、この特徴を分析し、オンライン上のコミュニケーションに適したコミュニケーション技術を身につけていくことが求められます。

オンラインにおけるファシリテーションの重要性
オンラインでは、多様な立場の人間が集まれるうえに、画面上では同サイズで並列されるため、視覚的に対等な関係で対話が可

能です。一方、信頼関係の構築がむずかしい、全体の雰囲気がつかみにくいなどの制約があり、自分の意見を述べることに躊躇する学生も少なくありません。そこで、オンライン上の議論において、ファシリテーションがより重要性を増します。参加者の積極的発言を促す、オンライン上のファシリテーションのあり方の研究が今後の課題となります。

コミュニケーションの余白の想像／創造

オンラインのコミュニケーションには余白が少ないと感じられます。授業前後の雑談のようなものが入る余地が少なくなります。そのため、信頼関係を作るのがむずかしい、チーム内での細やかな相談がしにくい、取材では、相手のオフィシャルな顔しか見えず、近寄りがたく感じるなどの意見が学生から出ました。オンラインのコミュニケーションにおいて、余白あるいはあそびをつくり、ある目的を達成する、議案について検討するというものの間にある、相手の人柄を知る、共感するなどを重視したコミュニケーションの場をいかに作るかということも今後のオンライン・プロジェクトの重要な課題であると考えられます。

オンライン授業に対する学生の意見

今回のプロジェクトでオンラインでのコミュニケーションがとても難しいことを再認識しました。オンラインでのミーティングは直接会って話す時よりも相手の感情が読み取りづらく、自分の感情も伝えにくいです。私たちは普段顔の表情をほとんど意識せずに会話をしていますが、オンラインになると反対に顔の表情でしか相手の感情を読み取ることができません。もちろん相手も同じです。話している時に今まで意識を向けてこなかった表情がオンラインだと最も重要な役割を果たします。それなのに対面では見えるはずのなかった、話をしている最中の自分がリアルタイムで画面に表示されるとつい顔が強張ってしまいます。また、相手が少しでも眉を顰めると自分の話は正確に伝わっているか、相手に対して失礼な態度になっていないかと不安になるのです。本当に些細なことが画面越しだと異常に大きな問題として感じてしまうことがたくさんありました。しかしこの課題には可能性もあると思います。それは普段表情を意識しない人が表情を意識し始めるということです。表情を意識するだけで相手への思いやりができ、それが相手を気遣った行動につながると思います。そしてこれは普段の生活にも活かせることだと思います。また、以前自閉症の方は相手の感情を読み取ることが苦手で、笑っている顔や怒っている顔、悩んでいる顔などのイラストを参考に人の感情を読み取っていると聞いたことがあります。もし表情を読み取ることに不自由を感じている人は、表情を意識する人が増えるだけで少し生きやすい世の中になるのではないかと思います。オンラインでの授業は対面の授業に比べて不自由なことが多いですが、だからこそ不自由をいかに解消していくか考えることで今まで見えてこなかったより多くの問題に気づき、新しい価値観を提案していくことができると思います。（越永 璃音）

オンライン授業のメリットは場所が制限されていないことだと思います。学生にとって、学校に行くことは義務ですが、自分の家で授業を受けられるというのはなかなか魅力的なことだと思います。そして、オンライン授業となると、遅刻する人が驚くほど減りました。恥ずかしいのですが、私は日本語のこの授業に二度遅刻しました。二度も対面授業で、渋滞や遅延に遭いました。オンライン授業となると、このような問題に遭うこともなく、パソコンがあれば、どこでも授業を受けられると思いましたが、佐々木さんに対する第一回目の取材のとき、私は iPad を持って友達の家にいたことで、関係する人たちに迷惑をかけてしまいました。その時友達は、わざわざ別の部屋を用意してくれましたが、壁が薄いため、隣の部屋に居る友達の話声が ZOOM に入ってしまいました。私は気づかないまま、インタビューを進めました。それで、やはりオンライン授業をうける場所を頻繁に変更しないほうがいいと思いました。毎回の音声や光の調整をしなくても、スムーズに授業を受けられます。これは自分の便宜をはかるためだけではなく、授業に参加するほかの人に迷惑をかけないようにすることも大事です。
また、学生だけではなく、取材されている佐々木さんたちにとっても、オンラインのほうがすごく便利でしょう。対面の取材になると、佐々木さんは横浜市市役所に勤めているので、武蔵野美術大学に来るのに２時間ぐらいがかかります。そのため、佐々木さんは往復４時間プラス取材される時間を空けておかなければなりません。オンライン授業にした今回は、仕事のある平日の夜でも取材を受けてくれるようになりました。
コロナが終息した後、オンライン授業が活用されなくなるのは惜しいと思います。例えば、取材のことをできるだけオンラインで行ったほうが便利ですし、平日でも簡単な取材ができるようにZoom を活用したほうがいいと思います。しかし、初対面のときはできるだけ実際に会ったほうがいいと思います。私と佐々木さんも実際に会うことで仲良くなれたので、オンラインでは直接会うことで得られる感情が足りないと思います。（譚 林宣）

オンライン授業を行うことによってカシオの方が会社から参加してくださったり学生も自宅から参加できたりパソコンがあればそれぞれの状況にあった場所で受けることができました。そしてコロナ禍における公共交通機関利用の危険性や不安、自分の体調管理などを考えるとオンラインでの参加の選択肢があることによって学ぶ機会への安心につながったように思えます。また仕事や授業の合間時間を使えるので双方の時間を合わせやすく様々な立場の方が集まりやすいと感じました。サラさんは市役所で国際交流

員として働いていらっしゃるので平日の業務時間内での取材となりました。本来ならば授業時間と被って取材が難しかったのですが移動時間がかからないので授業がない空いている時間に行うことができました。
一方、問題点としては一度閉じてしまうとすぐに集合ができないので伝え忘れや修正を全体共有するのに多少時間がかかること、場所の制限がないからこそ日常と授業への切り替えがしにくいこと、通信環境の影響でのトラブルがあることが考えられます。また、対面授業の方が小さな疑問点も聞きやすかったり、授業終わりの時間にチームメンバーのみで確認や話し合いができたり、細かな調整がしやすかったです。
正直、オンライン授業でコミュニケーションが円滑に取れるのか不安でした。画面に向かって話すことも複数人がオンライン上で集まって話すことも新しく、初めの頃はうまく自分の意見が言えず、毎回の授業後に一人で反省点と改善方法をまとめていました。オンラインだと相手の表情が読み取りにくく、仕草や雰囲気で感じ取ることができないために自分の中で発言することのハードルが高くなっていましたし、上手く伝えようとすればするほど画面が見れなくなってしまい、早口になっていました。ですが、サラさんへの取材の2回目頃からすこし変わったように思えます。手厚すぎるくらいの事前準備があれば自分が落ち着いて話せるのだと気づきました。事前に「用件の締め切り日時や注意点、考えられる質問と答え」だけではなく「自分が相手の立場だったら何が聞きたいか」を書き出しておくようになりましたし、Zoom の操作やイベント当日のスケジュールなど言葉では伝わりにくいと感じたことは画面共有で視覚情報としても伝わるように資料を準備しました。そして話すときは初めに今日伝えたいことの数を述べ、ジェスチャーをつけたり再度確認する時間をとったり相手に伝わっているか実感しながら取材をするようにしました。
オンラインの授業が当たり前となった今でもオンラインでのコミュニケーションはとても難しいですし、不自由に感じています。しかしオンラインだからこそ出会えた方、対話できた方がいます。そのような面を考えるとコロナ終息後もオンラインと対面の両方を実施しながら授業を展開する形があっても良いのではないかと思います。（矢野 美悠）

オンライン授業を通じて全ての参加者が同じ大きさの画面と声で、各自発言できる環境になったと思いました。その環境では全ての参加者たちの参加レベルを同じにすることができたので、自然に参加者も多く発言できたと思います。これからも参加者をもっと色んな地域から幅広く参加させることができたら、意見を多く話せる長所がもっと働くと思いました。課題としてはやはり場の雰囲気がうまく読めないところで、なかなか緊張が取れにくくなることだと思います。そこをうまく回せるのがファシリテータの役割かなと思いました。オフラインでの出会いで信頼感を築きながらオンラインでも多く話せるよう、割合を気にしながらやっていけば良いかなと思いました。（柳 廷和）

オンラインでの授業の実施について、メイリットデメリット五分五分な印象だが私はどちらかと言えば肯定派です。ただ今回の授業などにおけるオンラインでのインタビューには不自由だと感じました。
オンラインの特徴としてまず挙げられるのが、どこでも参加できるという点。これはメリットとして推したい点です。学校に行かず授業を受けられるのは私にとって非常に魅力的でした。私は家を出る際にもたつく性分で対面の授業ではいつも遅刻ばかりを繰り返してしまいました。逆にオンラインでの授業の遅刻は記憶の限りだと0で、少し早めに zoom にログインしていた場合もありました。余裕をもって家を出た際でも渋滞や遅延などによって集合時間に間に合わないケースもあったので、予定通り参加しやすいという意味でオンライン化は助かりました。
また授業に限らず、会議や話し合いの場面においてもオンライン化は活躍したと思います。どこから参加できるという点は、メンバーそれぞれの予定の合間を縫って話し合うことができるということに繋がりました。別件の会議と会議の合間に相談や、次の予定地までの移動時間中に会議への参加など、従来ではロスしていたスキマ時間をつかってメンバー間の話し合いを進めるができたのは非常に画期的な点だと感じました。
逆にデメリットとして考えられるのはオンラインでの交流では人物像が分かりづらい、という点です。実際、今回担当させていただいた松井さんには「田中さんはこういう趣味を持っていたんですね、知りませんでした。」とイベント後のやり取りでコメントいただきました。それによって当日までの打ち合わせの時点でインタビュアーとして向き合っているつもりでしたが、インタビューイーの松井さんから見た際には「よく分らない人が自分のアレコレを聴いてくる」という状況になっていたという事に気づかされました。また私もイベント後に松井さんのフェイスブックを拝見して、はじめて知る面が多くありました。実は当日まで「松井さん、大人な方で緊張するし、なんかこわいな」と感じることも多かったのですが、自分も思ったことのあるような日常的なシーンの投稿を見て、実際には怖がるような方ではなく自分と同じように毎日を過ごす方なのだと納得できました。休憩時間や隙間の時間に垣間見えるそれぞれの人物像については見る機会がなく、松井さんのエピソードが自分と掠りもしないようなモノばかりだったのもあって、どこか自分と全く違う生物のようにさえ感じていたのかもしれないです。今回の「多文化共生」という難解なテーマに真剣に向き合ってくださった結果のオンモードとその時間以外のオフモードをバランスよく知ることが 相手の人物像を知る大事な要素であると考えるようになりました。（田中 涼平）

プロジェクトメンバー

カシオ計算機株式会社

大塚 功
金 度希
松本 貴美子

武蔵野美術大学

<上級日本語 1-4 履修学生>
越永 璃音
譚 林宣
矢野 美悠
柳 廷和
田中 椋平

<芸術文化学科　米徳ゼミ>
石塚 詩織
王 鑫
小林 陵平
山本 友紀也

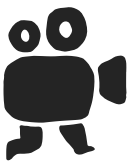
<担当教員>
三代 純平　　米徳 信一

<協力>
武蔵野美術大学研究支援センター
海老沢 聡子

お知らせ

産学連携でつくる多文化共生
カシオとムサビがデザインする日本語教育
三代 純平 / 米徳 信一［編］

CASIO と武蔵野美術大学による３年間のプロジェクトの記録が書籍になりました。



にっぽん多文化共生発信プロジェクト 2020 報告書
カシオ計算機株式会社｜武蔵野美術大学
発行日　2021年 3月
編集　三代 純平　米徳 信一
デザイン　米徳 信一
発行者　武蔵野美術大学 芸術文化学科・言語文化研究室　カシオ計算機株式会社